
「亀楽」の発刊について

亀崎直樹

On the publication of Kiraku

By Naoki Kamezaki

我が国の固有種ニホンイシガメは、環境省のレッドデータブックにおいて情報不足種とされている。つまり、「評価するだけの情報が不足している種」と定義されているのである。ニホンイシガメは日本人にとって身近なカメであるし、古くから慣れ親しんでいたカメである。そのカメに関する資料があまりにも少ない。一方、ミシシッピアカミミガメ(以下、アカミミガメ)は外来種であり、その生態系に与える影響は指摘されているものの、その侵入の程度を知ることでできる定量的なデータや分布に関する知見はほとんどない。つまり、日本の淡水性カメ類に関する情報は極めて希薄な状態なのである。

私はウミガメを専門としてきたが、毎年開催される日本爬虫両棲類学会でそれとなく行われる淡水カメの研究者たちの集まりにでていた。そこで交わされる主要な話題は、アカミミガメの駆除をどうするか、ということであった。皆、駆除すべきという意見で一致するのだが、その処分方法で意見が対立していた。殺して処分すべきとする意見と、教育的、動物愛護的な観点から殺すべきでないとする意見である。この対立は結局解決をみずに年月だけが経ち、多分10年以上が経過したと思う。

そんな不毛な期間が過ぎて、私は2010年4月から神戸市立須磨海浜水族園という水族館に勤めることになった。水族館ではウミガメの研究はやりたい放題かと思っただが、これがあまり面白くない。ウミガメはやはりフィールドが面白い。しかし、神戸からウミガメのフィールドは遠い。そこで、以前から気になっていた淡水カメのことを少し始めようと思い、まずは亀楽園という淡水カメの飼育水槽を造った。この水槽は野外で駆除されたアカミミガメを収容する水槽で、数千匹のアカミミガメの収容は可能である。もちろんこの水槽で野生のアカミミガメを完全に駆除することはできないと思っているが、それでも駆除すべきという考え方は啓蒙できている。とにかく、アカミミガメ問題はそれを広く一般に知らせることが急務だと考えている。そして、もう一つ実行に踏み切ったのはこの「亀楽」の発刊である。この印刷物の目的は、日本各地で断片的に得られる淡水カメの情報を残すことである。それによって日本における淡水カメの状態を把握できるようになればいいと考えている。ニホンイシガメは情報不足種からどのようなカテゴリーに移されるのか。心配でもあり、楽しみでもある。